
立待月恋草

村瀬ひさり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

立待月恋草

【Nコード】

N4231E

【作者名】

村瀬ひさり

【あらすじ】

傾城と歌われる花魁如月は実は男だった。月夜に現れる魔物と信じた相手と恋に落ちた武士と花魁の、幕末の京を舞台に繰り広げられるBL悲恋モノ（ラストはHAPPY END）です。

第1話

時は文久2年、14代將軍徳川家茂の世、それまで尊王派の天誅により悪化の一途を辿っていた京都の治安維持と幕府の威厳回復のため、すでにあつた京都所司代、大阪城代をも越える役職として「京都守護職」をあらたに置き、そこに徳川宗家の流れを汲む会津藩藩主松平容保に白羽の矢が立った。

人望が厚く、広く忠義のものとの覚えの高かつた容保はまだ27歳の若さで、そのため守護職の任は重いと再三固辞していたが、『將軍家の為には忠義を尽くす』との家訓に従い、同年12月家臣藩兵を引き連れて上洛した。

国許に居た時より君主の身边警護を司っていた河合は、このとき物頭として付き従つて京に入り、朝廷と幕府との折衝などを行う京都守護職公用方、公用方勤を賜っていた。

話は、京の都は会津に比べると格段の華やかさで、その治安を護るといふ責務はいささか難儀なもの、と思ひ始めた翌年の春のことである。

格子の隙間から、行灯に勝るかのような明るい光が差し込んでいた。

「月夜の晩は、魔物が出ると申しますよ」

したたかに飲んだ夕刻、なじみの親爺の一言にふと嗤つて答えた。

「まだ宵の口だ」

魔物など、出たところで一刀の元に切つて捨てればよいではないか。

そう高笑いを繰り出す男に、いやいや、とこれまた嗤い顔で親爺が言葉を返す。

「だんな、切つて捨てられる魔物と、そうでない魔物がありやすか

らねえ」

お気をつけんなって。

チャリンと音を立てて金子を置くと、じゃあまたな、と言いおい
て暖簾をくぐる。一足じゃりつと突き出して、月夜と言われた闇を
仰いだ。

「ほう、こいつは風流な」

見上げた空に浮かんでいるのは真白く輝く丸い月一つだけで、常
には煩いぐらいに瞬く星々も、今夜は月に遠慮をして姿を見せては
いなかった。

それだけに、昼のように明るい月の下を闇に解けるような黒の着
流しで歩く姿は男の気配をより濃くし、歩くたびに見える裾の返し
の朱の色が、なんとも言えぬ色香を漂わせていた。

こんな夜なら、あの者の申すとおり魔物が出てもおかしくはない
な。

思いついた考えに我知らず笑みを湛えている矢先、目の前の橋の
上にいつの間にかいたのかぼんやりと人の姿が見えた。

……まさかな、早々のご登場とは言うまいな。

酔いも手伝ってか、クククと嗤うと慣れてきた目がその人影を明
らかにした。

若い男のようだ。

橋の欄干に寄りかかって、ただ一心に月を見上げている。年のこ
ろは17、8か、明らかに己よりは年若に見えた男は、すぐ傍に寄
つても微動だにせず顔を上に向けたままだった。

「何をしておる」

振り返らないその顔を、どうにかして己に向かせたい、そんな気
が動いたのかもしれない。行き過ぎてしまえば良いものを、何故だ
かその横顔に声をかけねばならないという観念に囚われて、足を止
めて聞きただした。

ゆつくりと下りてきた瞳は暗闇の中でもキラリと濡れて輝き、そこだけが際立つ白の視線をひたりとこちらに合わせると、瞬きもせずと言った。

「月を見ておりました」

響いた声はやはり男のものだが、触りよく軽やかに耳に届くと、また視線を上を持ち上げた。

「とても美しいので、勿体なくて」

うつとりと囁く声はすらりと伸びた首筋を通して発せられ、無造作に縛っただけの髪が言葉に合わせて揺れるのが、まるで現世のものではないようだと思いつながら見続けて、

「そなた、名をなんと申す」

黙ってはいられなくて一歩近づいてそう問うと、

「見ず知らずのお方に名乗る名は持ち合わせておりませぬ」

こちらを見もせずと言つて、男はゆらりと立ち上がった。

「……お待さまは？」

差料に目を合わせて聞かれたのに、答えねばこの次はないと言いつめられたように何故だか焦って、身分を正直に明かしてしまった。

「松平様にお使いしてある、河合という」

「松平様……」

では、京都守護職の。

薄明かりにクスリと笑った気配がして、思わず刀に手をかけた瞬間、そこにやんわりと手の平が載せられた。

「わたくしは、月島と申します」

ほんのすぐ前でその名を聞いたはずなのに、手のぬくもりが消えたと思つたときにはその姿を見つけることが出来なかった。

まさかな。

月夜の晩は、魔物が出るといいますよ、切つて捨てられる魔物と、そうでない魔物がおりやすからねえ。

そういつて嗤った親爺の顔を思い出した。

・・・またここで、お待ちしております。

最後に聞こえた声はまことだったのか、そうでなかったのか、問
いただし相手を見失ったまま、闇が己の周りを取り囲み、全てを覆
い隠して其の時の様子さえ消し去っていった。

第2話

あくる夜。

男は橋の上で待っていた。

その姿を目に捉えて、河合ははやる心を抑えつつ、じりと足を進めて行った。

「河合さま」

掛けられる声音の低さは確かに男の持ち物なのに、耳の届くのはしつとりと艶のある女の色香を含んでいて、なんとも言えずこの身に絡みつく。

「お待ちしておりました」

闇の中に浮かび上がるのは、縛り上げた髪の毛のほつれから覗くうなじの白さとゆらりと揺れる瞳の濡れ。ずいと一歩近づけば、押されるようにして仰け反り欄干についた手の甲が白く映って力が入るのが見て取れた。

「……………待っていたと」

「はい」

明日もお待ちしていると申しましたので、同じ刻、同じ場所ですうして月を見ながら待っております。

柔らかい物言いがすぐ傍から聞こえて、たばかるな、と言ってやるうと其の肩を強く握る。

「今宵は月など出しておらぬ」

掴んだ肩を引き寄せて、その顔を仰のかせると、
「いえ、あそこに」

間近に見える瞳の動きにつられる様にして首を廻し、己の後ろに浮かぶ、端の少し欠けた月を見つけた。

「いつの間に……………」

「……………あなた様と共に、現れでて参ったのですよ」

わたくしが待つておりますのも、あの月が出てくれる故のもの。

「月夜だけは、こうしてお逢いしてくださいませ」

その声に捕らわれた身体はただ動きもせずについて、縋りつく両の手が襟の合わせを辿り、指先が喉元へ触れるその前に、己の腕がその細腰を抱き反った背中に指を滑らせた。

「河合さま」

名を呼ぶ声が、まるでむせ返るような甘い華の匂いを放ち、それに抗えぬままかき抱いた身体を尚もきつく抱きしめていた。

月の夜は、と言ったその言葉通り、其の形を半分隠した辺りから男の姿を橋の上で見ることとはなくなっていた。

「……月夜の魔物、か」

親爺の言つとおりだったかも知れぬ、切つて捨てられぬ魔物がそこに居つたのだ。そう思い始めた頃、君主松平容保より呼び出しがかかった。

「河合、島原は知っておるか」

「島原でございますか」

その名だけはかろうじて知っていた。

「左様、其の方は行ったことがあるか」

「いえ、そのような場所には縁がございませんので」

河合は京都守護職公用方、公用方勤を賜っていた。そのため常に御傍近くに居ることの多い河合にしてみても、このときの容保の要求は意外なものだった。

火急の用件、との呼び出しに急いで来てみれば他のものを全て払った上「近う寄れ」と手招きされ、ほんの一段下がったばかりの御前でなんと容易ではない事を聞かされたのだ。

「輪違屋の如月太夫の座敷に上がりたい」

輪違屋と言えば、御所に上がることの出来る太夫を何人も抱え、

その顔見世道中には花見客よりも見物人が集まるので有名な置屋である。それをこの俗事とは無縁の松平容保が口にするのを、信じられない思いで耳にした。

「聞けば大層な美形だそうな。その傾城とまで言われる美貌を間近で見て、世知辛い思いを晴らしてみたいものだ」

ああやはり、と言われた一言が胸に響いた。

將軍直属の役職で京都の守護を全てまとめ幕府を代表するという責務は、まだ若い君主には担いきれないものだったのかとそのあまりに重いお役目を省みて思った。

「……では、手配いたしましょう」

両手を付いて深々と頭を下げると、その上から「其の方も」との声がかかった。

「其の方一人が付いて参れ。他のものには内々にな」

下がってよい、と言われるまで頭を下げたままでその実、いったいかにしてこの難題を解きましょうぞと、その額に皺を寄せて考え込んでいた。

京の花街のなかでも唄と舞に洗練され、独特の文化さえ産み出していた島原はそこに行き着くまでもずいぶんと込み入った手筈を必要とされた。まず「一見さんお断り」として、どんなに名の通った大名であろうとも馴染み客の紹介でなければその大門をくぐるだけに留まり、揚屋（現在でいう高級料亭）に足を入れることは罷り成らんとして追い返されてしまう。そこで、例の親爺に詳しい事情は話せぬが、と言い置いた上で島原の馴染み客を紹介してはくれぬかと聞いてみた。

「ようございますが、どちらか馴染みをご所望の揚屋がございますか」

格の高い島原の太夫は自分の座敷と客用の座敷を揚屋に用意させている。どの揚屋に上がるかで、呼べる太夫も決まってくるという

ものだった。

「実は……輪違屋の如月太夫の座敷がよいと」

誰がとは言わず、言葉を濁したこちらの顔をうんうんと訳知り顔でうなづきながら、親爺は「左様でございますか」と言つと、

「それでは、なじみの口入屋に話を通しておきましよう。三、四日ほど待つておくんなさいまし」

にたりと笑つて、ではとぐい飲みを差し出した。

親爺に話をしてからさして日を置かずして、口入屋の手筈で伏見の両替商、千富屋正左工門と顔を合わすこととなつた。

「河合様はどちらのお武家様でございますか」

京でも一、二を争うと評判の両替商である千富屋のことは、その名は知つていても勘定方畑は一度も携わつた事のない己には用のない商人であり、そのため相手方も此方を知らぬのはいた仕方ない事とは思つたがここで素性を明かしてもよいものか、と訝しく思った。しかし、

「花街は身分の上下など無用のところでございますが、嘘偽りは通じませんぞ」

顔こそ笑い顔ではあるが、その内は偽ることなど許さずと強く向けられるその言葉の潔さを感じ入つた。

「……失礼をした、某は京都守護職松平容保にお仕えし、公用方勤を賜つておる」

「では、輪違屋の如月太夫をご所望は松平様で御座りますか」

ほほう、と驚いた顔をした千富屋は次に居住まいを正すと、一つ下がつて両手を畳に着ける。

「かしこまりました。其の儀千富屋正左工門、しかと承りましてございます」

ゆつたりと笑つた顔は、しずしずと下げた頭に隠れて見えなくなつた。

下弦を一つ過ぎた、二十三日夜の宵の事である。

第3話

初会といって今日は顔見世だけ、と千富屋に教えられて上がった座敷では、まだ見習いの振袖太夫が「ようおこしやして」と出迎え、「こつたいさん（太夫の別称）は、おあとでおいでで」と、なんとも耳の触り好い声で告げられると、立方さんと地方さんと呼ばれる芸奴がぞろりと並び、そのれの掛声と共に賑やかな唄と舞が催される。

其の方一人と命ぜられて、まだ若輩者の己が主君の隣でこうして色香漂う揚屋の座敷に座り、どんな花々もこつても美しくは咲かぬだろう、と思うほど艶やかな舞を見るのはまるで夢のようだと感嘆する間も、あの者は今宵あそこには立ってはおらぬのだろう、と心中では思っていた。

今夜の月は新月、月夜の魔物は出るに知られぬ。

そのように考える己が可笑しくて、耐え切れず口の端を引き上げる。ふとしたときに思い出すのが、月島の白いうなじだと思うとうにもくすぐつたい気持ちにさせられて、参つたな、と華やかな中で独り思う。

この世にはこれほど美しい女人がおるのにな。

差し出された盃を手にとって、ぐいと飲み乾した酒の甘さにすらあの声音を見る。

色とりどりの衣が舞う中、思い浮かんだのは其の方の顔だけだったと次に逢つたら言つてやろう、そう考えていた。

一刻ほども過ぎたろうか、「こつたいさんのお出ででございます」との声が掛かり、するすると一間向ここの障子が左右に割れ開いた。新造たちが二重三重に重ねて照らす手提げ行灯の中、現れ出た姿に一時呼吸するのさえ忘れてあたりは静まり返った。

まず一步、衣擦れの音を立てながら見せた素足は白く小さく、ちらりと覗いた親指に思わず目を奪われた。纏っている着物は薄青と

蓬の重ね目で、大きく描かれた水仙の黄色が中の金糸と競うように眩しく映る。胸の前で心の文字に結ばれた帯は亀甲に朱が走り、薄い色目の衣と相對してより華やかに見せていた。太夫独特の髪かんざしは左右に4本ずつ、鼈甲に珊瑚が無数に散らされて、髪黒と面の白さをより強く比べ見させている。

「よう、お出でなさいまし」

女人にしてはちと低い声だなと思い、顔を挙げて其の瞳を見て。

驚いた。

……そなたは、月島。

出るに知られぬと思っていた月夜の魔物が、姿かたちを変えて今、目の前に現れていた。

三日と空けずに裏を返して、またも近くに寄らずに姿だけを見せる如月太夫の今日の出で立ちは、まだ闇になりきらぬような濃い青色に赤と朱の花が散りばめられ、其の上に檜扇と朱房が舞っている豪華なもの。柄合わせのような帯は貝扇で、こちらは金銀の糸をこれでもかというほどに使い、打掛けの中に覗く赤の間着がより艶めかしく見えた。

「美しいのう」

御所での歌にまで詠まれたというその美貌を前に、松平容保は目ばかりでなく心まで奪われていた。

「河合、三度目は馴染みと申したな。馴染み金を受け取ってくれば床を共に出来ると申したな」

すでに300両以上は使っているが、姿を見せるだけで手も差し出そうとしない如月太夫に、怒るところか何とかしてその機嫌をとろうとする何も知らない主君に対して、河合はどう申し開きをしようかとただそれだけを考えていた。目の前の天女のような女人は実は女人にあらず、と声高に言ってしまったような状況ではなく、なによりも己がそれを良しとしなかった。いかにしてこの如月太夫を、

いや月島を今の境遇から救い出してやれるのか、そのことだけが頭を占めていた。

何か仔細があるのであろう。

それが聞きたくて離れた場に座るその瞳を問いただしげに見据えると、悲しげな色を見せてわずかに面を伏せた。

「なにゆえ、あのように儂げであるのかの」

其の方向事が聞き及んでは居らぬか、との問いにこれはと話してしまふことも出来ず、そのうち衣替えと称して太夫は座敷を後にしてしまった。其ののちはまた唄と舞に酒が加わり、煌びやかな芸奴の姿に見惚れているうちに今宵も子の刻を過ぎ、

「こつたいさんはようおやすみやして」

との一言で、今夜も振られたことを告げられたのであった。

三度目の所望は、馴染み金といってこの先通い続けることを約束する手付けを支払うことになる。千富屋正左工門は、輪違屋の如月太夫はそれを受け取った事がない、と教えてくれた。

「いやじゃ、の一言ですませるんですわ」

いくら京都守護職様と言えども、太夫が嫌だと申しましたら無理強いは出来ませんぞ、と智恵をもらってその日を迎えた。

「河合、今宵こそは、であるな」

何にやら浮き立つ様子の主君に、その儀はかなわぬかもしれませぬとはどうしても言えず、ただ隣で座して待つこと半時。

「こつたいさんのお越しでございます」

とたいこもち幫間が手もみをせんばかりの風で告げてきた。

そうして。

するりと開いた障子から、現れたのはそれまでとはがらりと違った鮮やかな緋色の打掛けで、しゅるりという音が響いて見えた背中には見事なほどの鶴が一羽描かれていた。

「……なんともいふことな」

今にも飛び立ちそうなその様に、一抹の不安を感じたのは己だけであつたらうか。まるで見せ付けるようにぐるりと一回りすると、それに合わせて地方の三味線が一節曲を奏で始めた。

逢つて立つ名が 立つ名の内か 逢はで焦れて 立つ名

こそ まこと立つ名の内なれや 思ふうちにも隔ての襖

有るにかひなき捨小舟(合) 思や世界の男の心 私はし
ら浪うつつなき 夜の寢覚のその睦言を

思ひ出すほどいとしさのぞつと身も世もあられうものか

(合) 締めて名護屋の二重の帯が 三重廻る

深山うぐひす鳴く音に細る(合) 我は君ゆえ焦れて細る

ああ浮世 昔忍ぶの恋ごろも

(地唄 「

名護屋帯」)

愛しいあなたに逢うことも叶わず、その寂しさからこの身もやせ細りいままでは二重に巻いていた帯でさえ、三重にせねばならぬほどにやつれてしまいました。啼けば啼くほど身を細らせる山奥の驚のように、あなたを想えばまた焦がれて細るばかりです。以前のあなたを想い出しては、この想いが身体から離れることはいけません。

まるで、耳元で囁くように衣擦れの音が聞こえる。一つ舞つごとにその指先からは華がこぼれるようだと思えるのに、その瞳は今にも泣きだしそうに潤んで切ない。それを何故誰も気付かない、何故踊り続けさせる。見事じゃ、艶やかじゃと囁し立てる周りの声とは裏腹に、河合はその手を身体を抱きとめて、今すぐ舞を終わらせて

やりたかった。

……河合さま……

唇が、己の名を形付けたと思ったのは一瞬で。

舞を終えた如月太夫はもうこちらを見ようとはしなかった。

「あれ、こつたいさん」

そのまま座敷に移り来るものと思っていた一同の前から、太夫はすつと立ち上がると入ってきた障子を開けさせて裾を返して出て行ってしまった。

「何ごとじゃ」

待たぬかつとの松平容保の声が響いたが、花街ではどれほど位の高い大名や公達でも太夫の意向に逆らうことは出来ぬのが通例で、いかに京都守護職であるといってもそれを翻すことは出来なかった。しかしこの後、いくらお呼びを掛けようとも、いくら金を積もうと言っても、如月太夫が座敷に上がることは二度となかった。

上弦より一つ前の六日月が空に浮かんでいた。

第4話

「だんな、あちらさんがお待ちでございますよ」

月がその顔を全て出し始めた頃、なじみの親爺が小上がりの奥を指して声をかけてきた。

月夜の魔物はあれから一度も姿を見せず、果たしてその生死さえも気がかりになってきた時のこと、

「…………おぬしは輪違屋の」

見知った顔だところが気付いたのを見てとって、深々と頭を下げたのは輪違屋のあるじ、宗兵衛であった。

「河合さま、本日はお願いの儀がございましてお待ちいたしておりました」

頭を上げぬまま、すり下がって言う声にはどこか戸惑う色がみえた。そうして願い事があるという割にはしばらくそのままの姿でいて、こちらが向かいに座るまでぴくりとも動かなかつた。

「…………某もおぬしに聞きたいことがある」

差料を脇に置き、顔を上げよと申し付けて普段は抜け目のない顔をしている置屋のあるじと向き合った。聞きたい事がある、ところが言つた所為か、己の出方を待つように目を伏せじつとしている様子にこれは何かあると思つたが、それよりもこちらが先に、この輪違屋のあるじにどうしても問いただしいことがあつた。

「宗兵衛、あの者は…………如月太夫は女人ではあるまい」

いきなりの問いに、ぎよっとしたように身体をよろけさせると「も…………申し訳ござりませんっ」と畳にすり付くように這い蹲り、

「松平様を欺くつもりは、これ一つもございませぬ。これには仔細がっ」

とおろおろとして身を小さくさせた。いつも人の心の裏側まで見通しているようなあしらいをする者と、同じとは到底思えぬ様子である。

「それ、その仔細。なぜに如月太夫は……いや月島はあのよ
うな姿をしておるのだ」

月島、と口に出したとたんにはっと顔を上げると、

「……月島さまを、ご存知でございましたか……」

とても信じられない、と言ったように震える声を出した。

「月島さまは、お名前こそ出せませぬが、さる高貴なお方の落とし
種でございます」

その昔、輪違屋で都一と名を馳せた太夫が添い遂げられぬとわか
つている相手と深い仲になり、身籠った末に生まれ出たのが月島で
あり、そのときその太夫はわが子の顔を見ぬまま命を落としたのだ
とあるじは語りだした。

「私どもが悪かったでございます。まだ小さな童であつた月島さ
まが、あるとき戯れに身の回りの世話をしていた芸奴の打掛けをか
ぶつてお座敷へ転び出たのでございます。きっとあまりの賑やかさ
に惹かれたのでございましょう。そこでやんやと囃し立てられ、次
もお召しがあるうちにそのお美しさをお隠ししておけず、あつ
という間に引く手あまたになってしまわれたのです。そうして押し
も押されぬ太夫となつてしまつては、その本来のお姿をお隠し続け
るしか、無くなつてしまつたのでございます」

ですがそれも、のちのちお聞きするとお考えあつてのことと、月
島様はお話しくれました。

母親に瓜二つと噂され、その美しさは傾城とまで言われるご自分
のことを、もしや父親が聞き及んだら会いにきてくれるのではない
か、たった一つ母親が残してくれた血筋の証を胸に、これをいつの
日か父の前に差し出し親子の名乗りを上げる日が来るのではないか
そう望みをかけているのだと明かされまして、私は月島様のなさる
ことをお止めすることが出来なかつたのでございます。

「母親と同じ源氏名で座敷に上がるのも、そのお気持ちあつてのこ
と」

ですがそれもこれも、私が悪かったのでございます、太夫には、いえ月島さまにはなんの悪いところもございません。罰をお与えになるならこの私に、と言ひ募るあるじに、

「なんとということ・・・」

とすぐには他にかける言葉を見つけれずいた。

「したがその父親の事は、おぬしは知っておるのだから」

「・・・はい」

「何故引き合わせてやらぬのだ」

ここで輪違屋のあるじは、ぐつと詰まって畳に頭をこすり付けた。「めつそうもございません、おしるしにと月島様にお預けになられたお品についておりますのは三横菊紋、こちらから我はここにと名乗り出るわけには参りません」

「・・・三横菊紋と」

それは、京都守護職である松平容保とは立場を違う、攘夷派で国事御用掛を任じられた有栖川宮家の紋所ではないか。

はつと顔をあげた河合に、輪違屋のあるじはなお一層頭を下げて言葉を続けた。

「月島様はそれをご存知でございます。みだりに名を挙げられぬならば、せめてそのお姿を偲ぼうと、ご自分にお与え下されました名前の月をおしるしに重ねて、月の出る夜はいつまでも眺めてお出ででした」

そこで月島様は、あなた様に出会われてしまった。

河合様のことをお話くださるときの月島様は、なんともお幸せそうでした。ですがあなた様はご自分の父親とは対立の立場をおとりになるお方、会ってはならないと何度もお思いになられたとも、私めにお話くださいました。

「そうして、思いもかけず如月太夫の姿までお見せすることになってしまったご自分の運命をお恨みになられて・・・」

うつうつ、と唸るように言葉をつまらせたあるじは、どうか、どうか月島様をお助けくださいませ、と重ねて願ひ出た。

「・・・まさか、世を儚んてと言つことではなかるうな」
「いいえ、そのようなことはっ」

その心配は私どもも同じでございます。まさかのことにはならぬよう、お一人にはならぬように気は配っております。

とあるじに聞かされて、ほう、と息を吐いて安堵した。

よかつた、あの者は生きておる。

生死の心配はないとなると、では願ひ事とはいつたい何ごとだと考えた。黙ってしまったこちらを伺うようにこぶし一つにじり寄つて、あるじは話を続けた。

「松平様から再三太夫の身請けのお話を戴きましたが、いくら積まねましてもそれはお受けできませんとお断りいたしました」

「なに」

それは初耳だった。

主君松平容保はそこまで、本気だったのだ。

「そのお召しがありましたから、とうとう月島さまはお部屋にお籠もりになってしまわれました。そうして七日の日が経ちました昨日、私めにこう申されたのです」

河合さまに全てをお話して、今までのことお許しを請いたいこと。これから先、如月太夫として姿を見せることのないことをお約束したいとのこと。そのことを河合さまにお伝えしてくれないかと、涙ながらにお話になられたお姿があまりにも切ないご様子で見ているこちらが泣きたくなる様でございます。

あるじの話を聞くにつれ、この場から今すぐにも駆けつけたい思いにかられ、「案内せい」と立ちかけたが、「お待ちくださいませ」とすがって差し止められた。

「まだ何かあるのかっ」

「・・・月島さまは明日と。満月のあくる日にお越しいただきたいとお願ひにございます」

言われて窓を振り仰いでみた月が、きらりとその輝きを増したように思えた。

第5話

角屋の座敷でお待ちしております。

その言伝を聞いて、月が顔を出したと同時にその揚屋へと赴いた。「河合様でございますね。太夫がお待ちでございます」

今までとは違い、少し年を取った妾が案内を務め、これまでは入った事のない奥の部屋まで連れて行かれた。

黒々と磨き上げられた廊下を滑るように歩く妾の後をついて、迷路のような壁をいくつも曲がった後、こちらでございます、と開けられた襖の向こうに望んでいた姿はあった。

「如月太夫……いや、月島」

細く開いた窓から月を見ていた後姿は、黒地に金銀で眩いばかりに輝く満月が浮かび出ている打掛けに、裾から見える白と緋の間着が艶かしく、太夫独特の大櫛や花かんざしは見られずに、兵庫に結った髪には赤の漆の櫛止めを差しているだけで。

「……河合さま」

振り向いた顔に白粉のあとはなく、それでもなお白い面には一筋の涙が光って流れていた。

「ああ、ほんとうに……いらしてくださいだったのでね」

崩れるように縋り付いた手を取って、「泣くでない」と言いながらそのぬくもりをひしと抱きしめた。姿が見えなくなっただけから、この手に再び抱くことが出来るのだろうかと危ぶんでいただけに嬉しくて、また狂おしいほどの愛しさが込み上げてきた。最後に月島の顔を見たのが臥待の月の夜、あれからさして日も経たぬはずなのに、もうずいぶん遠くに引き離されてしまったように思っていた互いの身を、こうして近くに感じることでできる幸せを手放したくはなかった。

「……もう、離しはせぬぞ」

想いの丈をこめて言葉を吹き込む。

「いいえっ・・・」

いいえ、このような浅ましい身をこうして抱きしめていただくだけでも本望でございます。この姿、あなたさまには知られたくはなかつたのにわたくしは・・・

わたくしは、あなたさまのことが忘れられなかつた。

見つめあつたその瞳から、また新たな涙が零れ落ちた。

嫌々をするように腕の中で頭を振るその様を抱きとめて、忘れるなどと云うな、とかき抱いた。

重ねた打掛けの下に着ていた間着は白の縞紋で、島原褌と呼ばれる独特のものだった。わずかに見える緋色は肌のすぐ上につけた内着、透ける素肌に映えるそれは、なおさら色香を匂いたたせた。

ゆるりと解かれた膝の合間に手を差し入れて、しつとりと温かいその手触りを確かめるように撫でる。上にすりあげた手をゆつくりと戻して、わずかにまた開いたその隙間に指を伸ばした。

もう一度、また撫で上げて。

ふるりと震えた背中の上で、甘い鬢付け油の匂いが左右に揺れた。もう、離しはしない。

重ねていい募つて、答えぬ唇を戒めるようにきちりと噛み付き、こじ開けて翳つた。ひゅうと乾いた声をあげて、逃げを打つその顎を捉えて己の方を向かせる。その濡れた瞳はこの顔しか映してはいないのに、なぜこつまで不安に揺れるのだ、何故そのように心を塞いでいるのだ、と聞きたくて。

応えてようとはせぬその喉元に舌を忍ばせ、荒々しく攻め立てた。
「あ・・・あっ」

差し入れた指が湿った茂みにたどり着いて、やわりと息づく証を握りこみ、その形を変えるようにゆつくりとなぞつた。切なげな声をあげたその顔を覗き込み、ただ目をつぶり吐息を洩らすその口元から覗く白い歯に魅入られた。

ああ、この身体もこの心も全て手に入るのであれば、後は何もいらぬと今そなたに誓ってやれるのに、そう考えて。

不意に己のことを振り返った。

この手を取るのは、きつと許されることではない。それを知って応えぬのか。そなたの父は己の主君とは相対する攘夷派、そして輪違屋の太夫としての身を欲しがられているのは己の主君。

それを思っつてそなたはその嘆息をつくのか。ただこの一夜を今生の思い出にして、あとは忘れるというのか。

……そうは決してさせぬ。月島、其の方はこの河合のものだ。

うなる身体の言いよのない媚態に、その頬の吸い寄せられるような赤みに、白い歯の間に見え隠れする甘い舌に。

魅入られたこの身がどうなるかと、そなただけは。

そなただけは、誰にも渡さぬ。

「たとえそれがあの世でも……」

思わず洩らした言葉に、組み敷いたその瞳がゆるやかに開いて。

……うっとり、微笑んだ。まるでこの世のものでないように。

見ていたのは、端の少しかけた月だけだった。

「河合さま」

耳元で聞こえた声に目を開けて、まだ薄暗い部屋の中を見やった。飛び込んできたのは、暗さに浮かぶ艶めかしいまでの緋色の内着で、それに反するように見えるうなじの白さは、初めて出逢ったときと同じようにすんなりと弧を描いていた。

「夜が明けまする、もう……お別れでございます」

「離さぬと、約束したぞ」

「いいえそれだけは」

伏せた瞳にもう映してはくれぬのか、と言い寄れば、それは違い

まず、とはつきりと返された。

「もう、あなた様だけを見続けるわたくしはあとは何も映しませぬ」
ならば何故、そう迫った河合にゆるゆると首を振る。

ですがこの先はこれをわたくしと違って、河合さまのお心に住まわせてくださいませ。

そういうと、鮮やかな緋の小袖をびりりと引き裂いて、赤の櫛止めをそれに包み込んだ。載せられた手に吸い付くような柔らかかな絹は、今まで抱いていた身体に似てすぐに肌になじみ、尚更抱いた身体の温かさを思い出す。

「……きつと、迎えに来る」

いいえ、と続ける声は抱きしめた胸の中にかき消して、聞かなかつたと言い張った。

最後に歌を、お聞かせくださいませ。

明けきつた空に目を向けて、月島はそう強請った。

「わたくしが先に、河合さまは後の句を」

そういうと、薄く開いた窓から見える朝日に背を向けて、半身を起こしたしどけない姿で言葉をつむぎだした。

「……いつ来ると つれなく思う 暁に」

柔らかい声に引き出されるようにして、日が差し込む。

白い光に掻き消されるようなその気配を、押し止めるためにひたりと見据えた。

「思い望むは 立待の月」

返した言葉にその瞳を見開いて、零れんばかりの端から涙が一雫流れ落ちた。

「待っている」

今宵の月はそなたとはじめて出逢った月。迎えに行くのが悪いなら、月夜の魔物に逢いに行こう。逢えるまではいつまでも、立待ち続けるぞとその耳に囁いて、名を呼んですがる身体をきつくきつく抱きしめた。

『いつ来ると つれなく思う 暁に 思い望むは 立待の月』
夜が明けてしまうと愛しいあなたとお別れしなくてはなりません。
ん。ああ、そう思うとこの夜明けが恨めしくてならないのに、今夜
の月は立って待てばすぐに出てくる立待ちの月。その月のようにあ
なたと逢える時間もまたすぐにやってくるといいのに。

後朝の別れに交わした約束を胸に。

その日から、河合は陽に隠れた月を追いかけたのだ。

第6話

月日が流れた。

京の都に、いつからとなく人の口に上がった噂があった。

「輪違屋の如月太夫が禁裏に召しあげられたと」

「とうとうかえ、やはりあの美しさは禁裏にこそ在って良いものだわいな」

「しかしあの姿が見られなくなったのは残念なこと」

「道中でも見かけなくなつたのはそのせいかいな」

市中を練り歩く花魁道中で、如月太夫の姿が見えなくなつてから次第に増えていったその噂は、半年も経つころには噂ではなく本当のこととなつていた。

「月島様、いかがなされました？」

街角に立つて話し込んでいる町人の声に耳を奪われていた月島は、「いや、なんでもない」と返事をする、小姓の葵丸の先に立って歩きだした。葵丸には今しがた訪ねてきた千富屋から、河合にと預かってきた物を持たせていた。

年号が変わつた慶応2年、河合は幕府の命によりロシア訪問団の一員として外国奉行小出大和守に随行し欧州へ渡ることとなつた。それまで松平吉保を守ること、そして京都の治安を守ることに専念していた河合にとって、この欧州行きは古いものからの脱皮を決意させるものになった。

「河合様も何かとお忙しいことと存じますが、どうかこれをお渡しくださいますか」

千富屋正左工門が差し出したものは一抱えほどの四角い箱だった。「これは写真機と申します。出島に出入りしていたものから手に入れましたが、あちらではカメラと呼んでおると申しております」

「カメラ？」

「左様でございます。これこうして構えてここを押して、しばらく動かずにおりますと先にある景色がこの中の紙に写ります」

「写る？」

両手で抱えた箱の中を覗き込んで、いったいどこに何があるんだと洩らす月島にふ、っと笑い掛けると千富屋は失礼いたします、と声をかけて後ろに回った。

「こう持っていたいて・・・そう、ここをこう持つのですよ」

手をとって箱の使い方を教えていくと、月島の白いうなじが目の前で伸び上がって、その上にある小さい耳があらわになっていくのがなんとも艶かしく見える。今はこうして若衆の姿になっているというのに、どうにも甘い鬢付け油の匂いがふわりと浮いてきそうので一瞬戸惑って回した腕を宙で止めた。

「いかがした、千富屋」

わずかに振り返った顔が間近で、思わず仰け反った。

「月島様、後生ですからそのように以前の顔をなされないでくださいまし」

「以前のと・・・」

「はい、如月太夫のお顔でございます」

その名を聞いて、ぎよっとしたように身体をこわばらせた。「それは・・・」と声が続かなくなった月島に、これは本当に申し訳ないことを言ってしまったと千富屋正左工門は慌てて後ろに下がり頭を下げた。

「申し訳ございません、私の慢心でございました・・・あなた様は会津藩家老、京都守護職さまお側付きの河合様の想い人でいらっしやいますのに」

顔を上げられないでいる千富屋に向かって、怒るのなら当然と思えたが、月島はそうはしなかった。

「なにを言い出すかと思ったら・・・昔の話ですか、懐かしいこと」
ふふふ、と笑い出すと止まらなくなったように顔をほころばせて、

目の前にある千富屋の肩に手を伸ばした。

「そんな話が出るのも、あなたと宗兵衛の2人だけだ」

今は白粉も塗っていないその顔が前にも増して天女のように神々しく見えて、如月太夫のときよりもなおさらまぶしく感じる。ああ、河合様もこのように美しい方を手に入れられるまでにはそれ相応の苦労はなさったが、こうして市居にいる今のほうがよりご心労のことだろう、と思わず苦笑する。

そう思うと大変だと思ひもすれ、またご自得のことよ、とも思う。そうして、今は顔を出していない月が鮮やかな満月だった夜の翌日を思い出していた。

月島に立待続けると言った河合が、その足で向かった先は伏見の両替商、千富屋正左工門のところだった。

「これはこれは河合様、お久しぶりでございます」

奥座敷に通されて、人払いをと所望して茶を出す女中がいなくなつたあと、河合は座していた敷物から外れるとすいと手を突いて頭を下げた。

「千富屋正左工門殿にお願いの儀があつて参つた」

いきなりのことに千富屋が驚いていると、どうかこれから申すことは他言無用でお願いしたい、と言ひ置いてそれはそれは信じられないことを言い出したのだ。今をときめく輪違屋の如月太夫が本当は男であること、しかもそれを河合に知られてこの先二度と如月太夫として皆の前には出ないと誓つたことにも驚いたが、それよりも今生の最後の思い出にと、河合と契りを交わしたというのにはなおさら驚いた。

「…………失礼ながら河合様、私を謀つておいでではないのですか」

「ならばもう少しましな事を言おうぞ。これはすべて誠の事、そこで其の方にお願ひしたい」

「私に出来ますか？」

「そなたにしか出来ん」

にやりと笑ったその顔は、有無を言わさぬ強いものだった。

待ち続けるといった河合を信じぬわけではなかったが、しかし如月太夫としての自分を残したままあの方の元へ行くわけにはいかぬと決めて、月島はいつそのこと京を離れようと考えていた。その頃の京都は尊皇攘夷派の力が増大し、その鎮圧に来ていた京都守護職の役割はなかなか重く朝廷側からの圧力も日増しに強くなっていった。そんな中で幕府から命を受けている河合、ひいては松平吉保に自分の存在が明らかになつては迷惑になる、と考えたのだ。河合を涙とともに見送ったあと、しばらくは何も出来ずに泣き濡れていたが、そうと決めると置屋のあるじである宗兵衛に身分を捨ててここを出て行くと告げたのだった。

「月島様、千富屋のご主人がお話しがあると申しております」

月島の話聞いて、何か言いにくそうな様子で宗兵衛は話し出した。

「千富屋様が？」

「はい、先ほど使いのものが参りました。今宵夕刻、揚屋の座敷でお待ちいたしたいと」

「如月に会いたいというのなら、どうかご勘弁をと……」

「いえ、月島様にと申しておいでです」

それまでの弱々しい風情が一変して、月島の目にきつい光が宿った。

「今……なんと」

「千富屋正左工門様は月島様にお話ししたきことがあると申して参りました」

「なぜ、なぜに千富屋は私のことを知っておるのだ」

「……いらしていただければ判るとの言付けでございます」

そう言うと輪違屋宗兵衛は、ここを出て行かれるも月島様のご自

由でございますが、千富屋のご主人が何用でお話したいと申してお
るのかそれをお確かめいただいてからでも遅くはございませう、
と進言してきた。

はたして千富屋の真意はいかに、と胸のうちがざわめくを感じ
ながら、ただ一つ母から譲り受けた父親の証という懐剣を抱いて行
こうと心に決めて、

「わかった」

とすでに如月ではない声で一言答えた。

第7話

如月太夫が座敷を構えているのは、角屋という京では知らぬもののない揚屋である。

「月島様に」といわれては来たものの、この部屋に入るのであれば正装まではしなくとも、あの晩のように打掛けぐらひは羽織っていかねばなるまいと選んだのは、黒から濃紺へと変わる段染めの上に金銀で百花をちりばめたもの、抑えた中にも手の込んだ華やかさが判るその一枚は、実は月島の母親が好んで纏っていたものだった。

「太夫」

先振りも何もつけずに一人座敷に入ってきた如月太夫に、こちらも一人で、しかも酒の用意もさせずに待っていた千富屋正左工門が声をかけた。

「いや・・・月島様、どうぞそのような物騒なものはお仕舞いくださいませ」

兵庫に結った髪には白い水引しか見え、華やかに見える打掛けの下にはまるで死装束のような真っ白な内着をきていただけで、縛った帯の上、胸元でしっかりと手にしているのは黒の漆も鮮やかな切っ先鋭い懐剣だった。

「何故その名を知っている」

話を聞くまでは座ることすらしそうな様子に、千富屋は身体一つ下がって畳に手をつく、「お願いでございます」と視線はずさずに身を伏した。

「どうか、これから先申し上げることに嘘偽りはございませんのでその懐剣はお仕舞いくださいませ。私に向けるならまだしも、ご自分に向けられては言い出し難うございます」

見つめ合った視線を月島のほうから外して手を下げると、ほう、と安心したように息をついて千富屋は背筋を伸ばした。そうして後ろに用意していた一抱えもある紙包みを前に押しやると、これは河

合様からの言付けで、と話し出した。

「先の後朝にお別れをされてから、河合様は私の元に参られました。一切の仔細をお打ち明けになられました。そうして、どのような手立てをもつてしても、あなた様をお助けいたしたい、そう仰られました。しかしあなた様が如月太夫としては、待ち続ける河合様の元へ参ることはないだろう、それも仰られました。そうしてこの私千富屋に目を付けられたのです。私は禁裏にも上がることのお許しを戴いておりますのでね、あなた様がいなくなれましてもその先どうなられたのか、人々が不振ならない様にいたすことなど容易でございますよ」

「いったい何を言い出すのか、と怪訝な顔を見せる月島になおも続けた。

「松平様も禁裏に召し上げられたとお聞きになればあきらめるだろう、と河合様はお考えになられたようですよ。さすがに知将と呼ばれることだけあるお方でございますね、人の心を読むのがうまい」
話しながら差し出した包みを上から順に紐解いてゆく。一番上には鮮やかな蒼地に若竹を思わせる緑葉を流して描いた中袖の着物と、その下には色を合わせた濃紺の袴、足袋も帯も男仕立ての黒絹で、はらりと広げた着物の紋が、河合の家紋であると気がついて顔を上げた月島に、千富屋はゆつたりと笑いかけた。

「月島様、何故に私がこのようなものをお持ちしたかお分かりいただけますか？」

「分からぬ、と声に出さずに月島は首を横に振った。

「河合様は、他のものならあなた様がきつと会うことすらお許しにならないとお考えだったのですよ。長年如月太夫の馴染みとして縁のあった私ならば、無碍には断らないだろう、そう仰られました。そうしてこの私があるあなた様の素性を知っていると分かれば、自分のところに来る以外残された道はないとお感じになるだろうとも」

「淡々と話す千富屋の、目がまっすぐ自分に向けられているのがわかって、月島はそれが真の事だと思い知った。

白粉をはいたように真っ白な手を伸ばし、その家紋の入った着物を愛しげに撫でた。あの朝、今生の別れにと渡した小袖はぼつてりと柔らかく包み込むような手触りだったが、今ここにある着物はまるで河合のように芯が通っていて、さらりと張りのある美しさだ。「これを身に纏って来いと……」

しゅると鳴る絹づれに惹かれて片袖をわが身に当ててみる。計つたようにびたりと映るその艶やかさに「おお」と千富屋が感嘆の息を洩らした。

「なんとも爽やかな若衆姿でございますな、それではすぐにでもお支度をなさってお出かけを。今夜は月夜にござりまするぞ」

「今夜？」

「今夜ばかりか、河合様はあの日から毎夜、あなた様がおいでになるのをあの橋の上でお待ちでらっしゃるんですよ」

「まさか」

信じぬわけではなかったが、まさか毎夜とは思わなかった。忘れねばと思いきも世もなく濡れて過ごすうちに、月は一回り巡ってきていたのだ。その間一日も欠かさずわが身を待っていてくれたとは。

『待っている』

最後に聞いた言葉が蘇ってくる。離しはせぬと囁いた声音と、抱きしめられた腕の温かさを思い出して、涙がこみ上げてきた。

「月島様、嬉しいときに涙は似合いませんぞ、ほらお立ちになってお支度くださいませ」

ほらほらと急ぎ立てられて、にこりと笑って答えた月島は纏っていた打掛けを肩からすべり落とした。

結い上げた鬘を解いて振り仰ぐと、襖から見えた月が一層白く瞬いた。

第8話

「何を思い出している」

千富屋から戻った月島が、己の顔を見たときとたんにはふわりと笑って、それがどうにも気になつて我慢できずに問いただした。

「いいえ」

それでもこぼれる笑みに変わりはなく、千富屋から渡されたという包みを大事そうにもって側にいるのが訝しくて仕方がない。手にした刀の刃を見るためかざした先に、その顔があるとわかると落ちて着かなくて、返した刃に曇りのないのを見て取るとするりと鞘に収めて右に置いた。

「何があつた」

きつく問いただすつもりはない。だが昔馴染みのところから帰った月島が、自分に何かを言いたげだということはわかつた。元々余り口を多く挟むほうではない月島が、思うところがあるときはこうして己に向き合うのだとわかつたのは共に暮らし始めてからのことだ。

「帰り道で私のことを町のものが噂してありました」

「噂？」

「はい、私……いえ、如月は禁裏に召し上げられたそうでございます」

「………ほう」

なんのことが、と我は関せずという顔で横を向いた。

「面白いものですね、それを聞いて懐かしくも嬉しくもありました」
「嬉しいと」

「はい、是で私は本当に、如月ではなく月島としてここにいてもよいと世間より言われたように思いました」

まっすぐこちらを見ているその顔が、昔の顔を思い出したように柔らかに微笑んだ。

「月島」

「はい」

こちらへ来いと手招きして、すぐ傍まで来たその手を掴んで引き寄せる。

「某にとつてそなたは元から月島だ」

一瞬目を見開き驚いた顔を、逃さぬとわからせるために懐に抱き込んだ。

「それ以外何者でもない」

「河合さま」

きつく胸に寄せた口元から、名前を呼ぶのが聞こえてなおさら手放せずにそのまま畳に伏せようとして、「今はまだお許しを」と小さく諭された。

「まだ陽が高うございます、それに・・・」

手から離れた包みを見やると、またふわりと笑いかけた。

「大事な伝言がまだでございました」

包みを開けると、中から四角い黒塗りの箱が出てきた。

「これを、千富屋は河合様にお使いいただきたいと伝えてくれと、申しております」

差し出された箱を受け取っても、はたして何に使うものかさっぱり見当がつかない。外側を手で叩いてみても、コンコンと小気味のいい音がするだけで、中は空洞らしいとわかつただけだ。

「これは何だ」

先ほどの千富屋との会話を思い出して、月島は一言一句間違えないように気をつけながら説明を始めた。

「これは写真機といって、千富屋が出島の商人から買い付けたものだそうでございます。なんでも『カメラ』と呼ぶとか。こうして持つて、しばらく動かずにありますと前にあるものがこの中の紙に写るのだそうで」

よく見ると、抱えた前には小さな穴が開いており、それをさえぎるための蓋が上下するようについていた。

「これで、欧州で見聞きしたものをお写しになって、お役に立てていただきたいと申しております」

傍で話をする月島は、真剣なまなざしで河合が手にした箱を見、そして河合自身の顔を見るために面を上げた。

「どうかこれがわたくしに代わってあなた様のお役に立つよう、お帰りまでお祈りいたしております」

畳についた指がまっすぐで綺麗だと、そう思った先で、月島はゆっくりと頭を下げた。

ロシア訪問団へ随行するまでもう幾日もない。あれこれとその支度を進める中、月島がそれをどう思っているのかあえて聞くことはしなかった。新しい世界を見るといふ期待とそこにある不安、それは河合だけが抱えるものと考えていたが、ここ何日かそれを思い悩んでいた。

「月島」

右に置いた刀に目を置いて、次に月島が持ってきた『カメラ』を見た。

「某にはこの使い方がよくわからぬ」

「いいえ、ですからわたくしがお教えいたしましょう」

「いや」

すっ、と月島の前に箱を差し出して、驚いて上げた顔に向かってにこりと笑いかける。そう心配な顔をするでない、と心の内が表に出たのか、ふと和らいだ表情に月島が尚更気がかりな顔をする。

「そなたは知っておるのだらう、ではそなたが扱えばよいのだ」

「河合さま・・・」

今なんと、と問いただす言葉を攫って河合は続けた。

「これは、祖父が殿より拝領した当家の家宝だ。某にお譲りくださるとき、肌身離さず持つようにと言われたもの」

言いながら手にしたのは今ほど手入れをしていた会津虎徹で、緩

やかに弧を描く姿はさすが名刀と常に思っていたものだった。その一部をなす鍔がまたすばらしく、満月の下で大きく羽を広げて自由に空を舞う時鳥が描かれている。表には素銅蒔絵、裏にはそれに呼応するように岩と根笹で静寂を表していた。

「これをそなたに預けよう、これはわが命、わが心」

ずいと差し出した刀に月島が驚き動けずにいるのを笑って、左手でその右手を取ってやり刀の鞘に触れさせた。

「一緒に行こう」

肌身離さずと言うのなら、そなたが持っていても同じではないか。笑って話す河合に「いいえ」と首を振り続けたが、一度決めると頑としてその考えを変えないのは月島もわかっていた。わかっていたので、その気持ちがあまりにも大きくて嬉しすぎた。

「河合さま」

「泣くな、そなたは笑った顔のほうがいいぞ」

ほろりとこぼれた涙を拭って、手渡された刀を大事に抱え直した。この先の世がどう変わるうとも、そなたと一緒になら何も怖いものなどない。

大事に抱えた刀ごと月島を抱き寄せて、死ぬまで一緒だと河合はその愛しい身体に誓ったのだった。

まだ桜の咲ききらぬ、春の日のことであった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4231e/>

立待月恋草

2010年10月8日15時43分発行